2020.04.24

霊長類研究所の不祥事

小嶋祥三

霊長類研究所（以下、霊長研）で不祥事が相次いで報道された。去年の暮れには松沢哲郎の研究費の不正使用、今回は正高信男の研究不正である。霊長研に籍を置いた身として、本当に残念に思う。両方ともまだ最終的な結論が出ていないので、以下は現時点で思ったことである。詳しい感想などはその後に述べるつもりだ。

わたしがとくに残念かつ悔しく思っているのは、両名がわたしも所属した心理関係の分野の人間だからである。松沢はわたしが心理研究部門の教授だった時の助教授であり、正高はわたしが認知学習分野（大部門化で心理部門が移行してできた分野）の教授だった時の助教授だった。松沢はその後、新設の思考言語分野の教授になり、正高はわたしの後を継いだ。二人に共通していたのは、強い「私」、「我」だった。それが「公」を乗り越えてしまったように思えた。二人が起こした不祥事で、室伏靖子先生や浅野俊夫さんと努力してきた霊長研の心理が、一瞬にして崩れたように感じた。

これから、心理系のこの二つの分野はペナルティが課され、苦しい立場に立たされるだろう。わたしの立場から、要望めいたものを述べるのは心苦しいが、敢えて述べさせていただく。

恐怖や不安と同様、怒りや憎しみは般化しやすい。「坊主憎けりゃ、袈裟云々」である。今回の不祥事は松沢、正高が起こしたことである。わたしも含め、霊長研の心理系が猛省しなければいけないことは当然だが、心理学が引き起こしたわけではない。霊長類の総合的な研究を目指す霊長研に、心理、行動面を研究する領域は今後も必要と思う。そのことは是非お考えいただきたい。

また、霊長研には真摯に霊長類の心理、行動と向かい合っている若手の研究者がいるだろうし、大学院には霊長類の心理学を研究しようとしている院生もいるだろう。彼らのことは是非考えてほしい。また、全国には共同利用で、霊長類の心理、行動に触れたいと考えている研究者、霊長類の心理学をやろうと思っている学生がいるだろう。彼らのことも考えてほしい。

以上、厚かましいことは重々承知だが、要望させていただいた。